書き換えの干渉
――文脈作成としての政策、適応、ミステリ――

浜田　明範

「彼らは私に交通費をくれたけど、私はそれを使っちゃった」。

アコ[1]は、ガーナ南部の田舎町で調査をしていた私の最も仲のいい友人のひとりだ。当時、50歳を目前に控えたアコは町の中でも特に痩せていたが、人懐っこく、多くの人に愛されていた。彼女がこの告白をしたのは、2007年７月のことだった。

すべての発言がそうであるように、その真意や含意はこれを読んだだけではわからない。それは特定の文脈の中で発せられたものであり、より確からしく解釈するためにはその文脈を知る必要がある。人類学の常套手段として、本稿ではアコのこの発言を文脈化していく。

ただし、ここで目指されるのは、アコの発言が置かれていた社会的文脈を文章の上で「復元」することではない。実際のところ人類学者は社会的文脈を完全に把握することはできない［浜本 2005a，2005b］。把握できないものを「復元」することなどできるはずもない。むしろ注意を払いたいのは、すべての文章がそうであるように、民族誌を書くことは文を積み重ねることで文脈を作成していく作業であるということである。本稿では、この文脈作成を、社会的文脈が作成されていく過程を追いながら行っていく。この作業を通じて、社会的文脈の読者であると同時に民族誌というもうひとつの文脈の作者でもある人類学者の営みを再検討し、人類学で社会的文脈と呼び倣わされてきたものの特徴について考えてみたい[2]。

Ⅰ　読者から作者へ

> ある日俺がマイクを持ち、本日は晴天なりと言ったとする。それを聞いた相手はこう思うだろう、なるほど折木奉太郎くんはマイクのテストをしたいのだな、と。しかし別の者はこう思うかもしれない。折木奉太郎くんは今日は晴れていると広く主張したいのであるな、と。
>
> ［米澤 2010：147］

文脈についての常識的な考察から始まる米澤穂信の短編小説「心あたりのある者は」［米澤 2010：145-183］は、文脈探索と文脈作成の区分が常に曖昧さをはらんでいることを手際よく物語っている。主人公である探偵役の折木奉太郎とその対話者である千反田えるは、不意になされた校内放送の意味を推測するゲームを始める。校内放送が普段とは異なる特徴を持っていることに気づいた二人は、その不自然さが放送の社会的文脈にあると考え、それがどのような社会的文脈の中でなされたのかを推理していく。

実のところ、奉太郎は社会的文脈を探索したいと思っているわけではない。千反田が校内放送の内容を不思議がり、その社会的文脈を心の底から知りたいと考えているのに対し、奉太郎の目

的はどんな適当な理屈でも筋が通ることを示すことにある。千反田が読者として社会的文脈を読み取ろうとするのに対し、奉太郎は作者として確からしい文脈を作成しようとする(3)。

逆説は、実際に何が起きているのかにさほど関心をもっていなかったはずの奉太郎の推理が、社会的文脈を読み切ってしまうことにある(4)。大方のミステリがそうであるように、推論の積み重ねは「正しい」事実の再構成へと帰着する。他ならぬ奉太郎自身が、推論と事実の一致は、運の問題でしかないと繰り返し強調していたのにもかかわらず。

人類学者は、千反田のような存在だと考えられているかもしれない。特定の発話や行為が置かれている社会的文脈が「そこに確かにある」と仮定した上で、それを知りたいと心底思い、それを読み取ることが自分の仕事だと考える。しかし、フィールドワークをしたことがある者なら誰でも知っているように、実際の現地調査がそのような探索として実施されることはほとんどない。それには三つの理由がある。

まず、人類学の現地調査では、いったい何について調べることが社会的文脈について調べることなのか、予めわかっていることは滅多にない。そもそも、自分が調べようと思っていたこと、つまり、社会的文脈に位置づけようと思っていた当の発話や行為が、実は調べるに値しないものだったことに調査がはじまってから気づくことすら珍しくない。人々がどんなことに関心を持って、どんなふうに生きているのか、とりあえず片っ端から調べていくうちに、「あれとこれは実は関係していて、だから、あのことはこのことの社会的文脈の一部なんだな」と分かるのである。社会的文脈は、はじめからそれとわかる形で存在しているわけではない。調査を行っていく中で、その中に位置づけるべき行為や発話の選定と並行して、常に揺れ動く流体的なものとして立ち現れてくる。

人類学者が千反田のようになれない第一の理由が社会的文脈に位置づけるべき現象を決定することの困難と関連しているならば、第二の理由は社会的文脈の汲み尽くせ無さと関連している。果てしのない文脈のどこに焦点を当てて適切な社会的文脈とすればいいのか。そこには常に恣意性がつきまとう。同じ地域で同じ対象について調査をした二人の人類学者がひとつの現象について異なる記述を行うことは決して珍しくない。社会的文脈は、それを読み取ろうとする者の視点と離れて存在するわけではない。社会的文脈と視点は癒着しており、一方が変われば他方も変わる。そのため、「それを調べれば何かが分かる」というような客観的で確固とした形での社会的文脈を想定することはできない。

さらに厄介なことに、仮に第一の理由と第二の理由になんとか折り合いをつけて、社会的文脈らしきものを見出すことができたとしても、社会的文脈が自白をして「実際に起きていたのは実はこういうことだったのだよ」と、最終的な結論を提示してくれることはない。謎は残り続ける。人類学者は決して千反田が考えるような探偵にはなれない。ミステリとは違い、「推論と事実が一致する」ことを保証してくれる作者が不在だからである。

社会的文脈を読み解く探偵になれないとするならば、人類学者はいったい何者なのだろうか。もしかしたら、売れないミステリ作家にはなれるかもしれない。少なくとも、人類学者は作者にはならなければならない。

Ⅱ　文脈を作成すること

探偵は、社会的文脈を探索すれば仕事が終わる。他の登場人物に謎解きを披露する場合は、まさにそれが要請されることで残業をしなければならないが、基本的には謎を解くことが彼の仕事である。その後に続くであろう裁判にまで出張っていって、事件とその社会的文脈を説明する必要はない。物語外的には、社会的文脈の説明は神の視点を持つ作家が随時行ってくれる。

人類学者は違う。多少の恣意性を引き受けながら、ひとつの現象とその社会的文脈を切り取ったところで、仕事が終わることはない。彼は、自分でそれを言語化し、文章にしなければならない。当然のことながら、社会的文脈のあり方と文章における文脈のあり方は大きく異なっているわけで、人類学者は物事を説明するために、自分の手で新しく文脈を作成する必要に迫られる。人類学者の最終的な成果物が文章であるならば、文章における文脈作成の必要性は現地調査における目の付け所にも影響を与えることになるだろう。そうであるならば、人類学者の文脈作成に注目することは、決して些細な問題ではない。人類学者は、千反田のように社会的文脈を読み解く読者としてではなく、むしろ、奉太郎のように、確からしい文脈を作成していく文脈作成者として自己を規定すべきなのかもしれない。

表１：社会的文脈の読者から文脈の作者へ

	読者	作者
社会的文脈	探偵としての人類学者（千反田）	
文脈		作家としての人類学者（奉太郎）

もちろん、これまでに人類学者は無数の文章を生産してきている。このことは、それらの文章と同様に無数の文脈が作成されてきたことを意味している。だから、人類学者は文脈の作成の仕方についてすでによく知っていると考えることもできる。また、人類学者の書き手としての側面については、様々な議論や試みが行われてきた［e.g. クリフォードとマーカス（編）1996］。だから、それらの議論に倣って、人類学者がどのように文脈を作成してきたのか、具体的な民族誌を分析していくことも可能であろう。それが作者としての人類学者について考える上で極めて有効な手法であることを認めた上で、本稿では少し違った方向で文章を重ねることで文脈を作成していきたい。

まずは、文脈作成者としての人類学者が共通して行っていると了解されていることを簡単に確認しておこう。人類学者の文脈作成は、少なくとも二つの事柄によって限定をかけられてきた。

まず、人類学者はフィールドで見たことや聞いたことに対して、誠実であろうとしてきた。多少ナイーブな表現になるのは避けられない。前節で述べたように、人類学者は決して、社会的文脈そのものを何か客観的なものとして看取することはできない。しかしそれは、人類学者が自由気ままに作文してきたということではない。すべての（！）人類学者は、自分がフィールドで見聞きしたことと異なることを記述することは、最も避けるべきことだと考えている。

同時に、人類学者の文脈作成は、間テクスト性によっても限定をかけられている。人類学の立場から文脈について広範なレビューを行っているディレイは、人類学のパラダイムシフトは、社

会的文脈として何に注目するのかの変化と対応していると述べている［Dilley 1999：3］。構造機能主義、構造主義、（人類学における）ポリティカルエコノミー、ポストモダン人類学と並べてみると、それぞれのパラダイムが異なるやり方で現象を文脈化してきたことがよくわかる。

それだけではない。人類学者は「どの雑誌に投稿するのか」についても念頭に置きながら論文を書いている。投稿する雑誌に応じて、複数の種類の文脈を作成できるようになることは、洗練された人類学者になるための必須の要素のひとつと言っていいだろう。より論争性のある論文を要求する雑誌に対しては、理論的な文脈化に重点をおくだろう。地域研究系の雑誌に投稿する論文を書こうと思ったら、政治経済的な文脈化やフィールドの手触りを感じさせるための文脈化に力を入れようとするだろう。

そうやって、縛りを取り入れながら、人類学者は文脈を作成する。その最大の目的は、自分の主張することを誤りなく読者に伝えることにある。中でも、多くの人類学者が最も気を使うポイントは「フィールドで出会った人は決して馬鹿ではない」ということかもしれない。一見、奇異に見える行為も、それが置かれている社会的文脈の中では合理的である。そのことがきちんと伝わるように文脈を作成する。その他にも、「私はちゃんと論文を読んでいます」とか「私は確かにそこにいたんです」［ギアツ 1996］という、論文の本筋とは異なる印象操作を行うことも、人類学者が文脈に託す重要な役割のひとつである。これらのレトリックを使用するのも、結局のところ、読者の解釈の自由を制限することによって、特定の解釈を読者が行うための筋道をつけるためである(5)。論文を読まれて、「世界にはおかしなことを考える愚かな人がいるのだな」とか、「こいつは不勉強だな」とか、「きちんと調査をしてないな」と思われては堪らない。はっきりしている。文脈作成は読者の自由な解釈を縛り、特定の方向へと導くために行われる。

Ⅲ　社会的文脈の作成としての政策

個々の要素（文）を配置することによって人間の行為（解釈）を方向づけようとするのは、何も文章の話だけではない。同様のことが、社会的文脈についても行われている。社会的文脈が、モノや制度や人を配置することによって作られるという発想の代表的な例として、統治についてのフーコーの議論を挙げることができる。

重農主義者による食糧難への対処方法についての議論を例にとってみてみよう［フーコー 2007b：37-108］。フーコーによると、18世紀の重農主義者は穀物価格を常に最低にしようとする従来の政策を批判していた。穀物価格を下げるために強制されていた価格・ストック・輸出入・耕作地の制限は、撤廃すべきだとされる。むしろ、食糧難を解決するために重要なのは豊作の際に穀物価格を高く保つことであり、そのために輸出への報奨金の設置や輸入関税の引き上げなど新たな制度を設けるべきであるとされる。

豊作の際に穀物価格が保たれるということは価格の暴落によって農民が損をしないということであり、より多くの穀物を生産する農民はより多くの儲けを得られるようになる。このため、個々の農民たちはそれまで行うことのなかった耕地の拡張を行うようになる。これは食糧難が起きる可能性を下げることにつながる。同時に、穀物価格を高く保つためになされる貿易振興策は、不作の際の穀物価格の暴騰をも防ぐことができる。商人たちは穀物価格の高騰を見込んで売り渋りをすることによってある程度の利益をあげようと考えるだろうが、同時に、国外から穀物が輸入

される可能性を計算に入れることによって、売り時を探すようになる。このため、それまでのように穀物価格の無制限の高騰が起きるのではなく、ある一定の価格で上げ止まるようになるというのである。

ここで重農主義者が主張していることは、旧来の制度を撤廃し新しい制度を設けることで、農民や商人が生きている社会的文脈を書き換えるということに他ならない。書き換えられた社会的文脈が農民や商人の行為をこれまでとは違う方向に導き、それによって無制限の食糧難が起きるのを防ぐことができるというのである。

重農主義者の議論は、社会的文脈が政策によって継続的に書き換えられてきたことを教えてくれる。同時に、それは社会的文脈についてのある興味深い特徴についても示唆を与えてくれる。それは、社会的文脈は、必ずしも要素間のネットワークでは無いということである。例えば、未耕作地の存在と輸入関税の引き上げはモノや人間の移動によって直接的に結びつけられている訳ではないし、その必要もない。この二つの要素は、「ひとつの国家の内部に存在する」という一点において関係しているだけである(6)。しかし、何の関係もないように見えるこの二つの要素は、ともに農民の社会的文脈の一部となることによって、農民による耕地拡大という行為を導いていく。

このような社会的文脈の特徴について、フーコー自身は「環境」という言葉を用いて整理している。少々回り道になるが、ここで彼自身の言葉を聞いておこう。環境は、「ある物体が他の物体に距離をおいて及ぼす行動を説明するために必要なものです。……安全装置は……環境に働きかけ、環境を製造・組織・整備している。……環境とは、河川・沼地・丘といった自然的な所与の総体、個人や家の密集といった人工的な所与の総体です」［フーコー 2007b：25-26］。

相互にそれほど関係のない二つの要素が共同で事態の推移を導くという現象は、重農主義者の想定する農民にとってだけではなく、これから主張していくように、人類学者やガーナの人々に対しても当てはまるだろう。私たちは、「フィールドの現実と学会での流行が繋がっているから、こういうふうに書こう」と考えるわけではない。「フィールドの現実と学会での流行があるから、こういうふうに書こう」と判断をする。「フィールドの現実」と「学会での流行」は、必ずしも直接的に結びつけられている必要はない。しかし、それらは人類学者の社会的文脈をともに構成することにより、彼らの行為を共同で方向づけている(7)。

文章における文脈作成が人間の解釈行為の自由を限定し、特定の方向への筋道をつけるのと同じ様に、政策はモノや制度の配置を通して人間の行為を限定し、特定の方向へ導く。つまり、社会的文脈を作成するひとつのやり方なのである。

Ⅳ　社会的文脈の作成としての結核対策

冒頭のアコの発言に戻ろう。「彼らは私に交通費をくれたけど、私はそれを使っちゃった」。ここでアコに交通費をくれた「彼ら」は、彼女の住む田舎町プランカシ（Pramkese）から少し離れた中規模都市カデ（Kade）にある大きめのヘルスセンターに勤めている看護師たちのことを指している。「彼ら」の仕事には結核対策プロジェクトへの参与が含まれており、アコに交通費を渡したのはその仕事の一環としてであった。そうであるならば、アコの発言を理解するためには、結核対策プロジェクトという特定の政策がどのように社会的文脈を作成していたのかをた

どっておく必要がある。

ガーナにおける結核対策は、1990年代に入ってから活発化したとされるが［GHS n.d.］、現在の形で対策が講じられるようになったきっかけのひとつが、2005年８月にWHOが行った「アフリカにおける結核の蔓延に対する非常事態宣言」である。これを受けて、ガーナでは「STOP TB」や「グローバル・ファンド」といった国際NGOの支援を受けた結核対策プロジェクトが展開することになった。このWHOの宣言もまた、それ自体特定の社会的文脈に導かれて行われたものであり、その社会的文脈も様々な行為の結果として作成されてきたものである。社会的文脈の汲み尽くせ無さを念頭に置くと、あまり深入りするのは得策ではないのだが、その社会的文脈について簡潔に整理しておこう。

現在でも、世界で最も多くの人命を奪う感染症のひとつである結核は、サブサハラ・アフリカにおいても依然として猛威を振るっている。WHOの見積もりによると、2012年には約860万人の結核患者が新たに見つかり、約130万人の結核患者が命を落としている［WHO 2013：1］。1950年代にストレプトマイシンが、1960年代に現在でも標準的に使用されているリファンピシンが普及したことにより、結核は不治の病から治療可能なものへとその位置づけを変化させた(8)。にもかかわらず、依然として結核が大きな脅威となりえている理由として、HIV/AIDSとの合併症が致死的である(9)ことの他に二つの点を指摘することができる。

まず、結核は貧困と負のスパイラルを引き起こすことが挙げられる。結核による死亡者数の減少に大きな貢献を果たしたのが、抗生物質やワクチンの開発ではなく栄養状態や不衛生な環境の改善にあったことはよく知られている［マキューン 1992：74-85；佐藤 1999］。つまり、結核を発症した患者は、もともと栄養状態が悪化している可能性が高い。アコの暮らしていたガーナ南部の農村地帯においては、栄養状態は貧困と直接的に結び付けられる。カカオやアブラヤシ、オレンジといった商品作物を主に生産している農村地帯の生活は、自給自足とは程遠い。朝食を自前で作る家庭はむしろ少数派であり、子供たちの多くは屋台でポリッジや白米、バンクー（*banku*）(10)といった食べ物を買い求めながら学校に向かう。また、夕食を作る際にも肉や魚、トマトやオクラといった「おかず *atosodie*」の多くは、商店で購入される。ここでは、栄養状態はまさにその人がどの程度のカネを食事にかけられるかによって決まってくる。結核は、比較的長期の治療が必要になる病気でもある。結核を発症した者は最低でも六カ月に及ぶ薬物療法を実行することが求められる。その間も、病魔は患者の体を蝕み、体力を奪っていく。農作業が困難になる患者はますます困窮し、その栄養状態は悪化する。貧困から結核が生じ、結核が貧困を悪化させる。

次に、結核菌の中には、薬剤への耐性を獲得しているものがある。すべての病原体と同じように、特定の薬剤による淘汰圧に晒されると、より薬剤に抵抗力のある結核菌のみが体内で生き残るようになる。そんなとき、薬剤を飲む間隔を開けてしまうと、薬剤に抵抗力のある結核菌が増殖することになる。結核は人から人へと直接感染するため、そのような結核菌は他の人へと感染することもあるだろう。このプロセスを繰り返すことによって、使用されていた薬剤に対する耐性を身に着けた結核菌が生まれる。通常の方法では治療できない薬剤耐性結核菌の存在は、結核の治療を難しくする(11)。

結核患者の発見は、基本的には各地に配置されているヘルスセンターや病院の外来において行われる。病気を治療するためにやってきた患者が、長期に渡って咳を続けていた場合、結核であ

ることが疑われる。しかし、ヘルスセンターでは結核の確定診断を下すことはできない。結核が疑われた患者は塗抹検査やレントゲン写真を撮るために設備の整った病院へと送られることになる。このとき、ただでさえ困窮している患者を遠くの病院まで誘導するのは、それほど簡単ではない。ガーナの結核対策プロジェクトではこの際の交通費を負担することによって、患者がレントゲン写真を円滑に撮れるように筋道をつけていた。

医師によって結核の確定診断を受けた患者は、地元のヘルスセンターに戻り、そこのコミュニティ・ヘルス・ナース（CHN）の管轄のもとで治療に励むことになる。このとき、基本的な治療方針として疑似的に採用されているのがDOTS（直接監視下短期治療療法）である。DOTSは、患者が薬剤を服用したかどうかを医療従事者が直接、目で確認するという方法であり、結核治療の最良の方法として世界的に標準化されている治療法となっている[(12)]。

患者はまず、治療に関する方針について説明を受ける。これから半年にわたって毎日欠かさずに薬剤を飲まなければならない[(13)]。飲み忘れが無いように、薬剤を飲んだらこれから渡すカードにマークを付ける。これを毎日続ける。とりあえず、ひと月分の薬剤を渡すので、またひと月後に訪れるように[(14)]。薬剤を飲んで調子が悪くなったら、遠慮なく報告してほしい。それから、激しい運動はできるだけ避けなければならない。もし、子供と一緒の部屋で寝ているなら、寝室を分けるように。可能ならばバナナやオレンジ、パイナップルといったフルーツをいっぱい食べたほうがいい。二ヶ月経ったら一度検査をするので、また病院に行くことになるよ。

このようにして、半年にわたる闘病生活が始まる。治療を始めてから二ヶ月後と五ヶ月後、及び半年後に痰の塗抹検査を行い、結核菌が検出されなければ、半年の投薬によって治療が完了したと見なされ、治療は終了する。逆に、痰から結核菌が検出されると、患者は耐性結核に感染しているとされ、別の抗生物質を用いた治療を今度は二ヶ月間継続することになる。この場合、投薬は経口ではなく注射を通じて行われるので、入院や転居が必要になることもある。

それでは、結核対策プロジェクトはどのような社会的文脈を、どのように作成しているのだろうか。後者の問いについては、比較的容易に回答することができる。結核対策プロジェクトは、重農主義者の政策と同じように、既存の配置に何かしらの改編を加えることによって社会的文脈を作成している。病院やヘルスセンター、医師や看護師、レントゲン撮影器といった要素は結核プロジェクトが導入される以前よりそこに存在していた。結核対策プロジェクトは、病院やヘルスセンターにおける結核患者の取り扱い方を変え、そこで利用できる薬剤やカードといったモノを配置し、患者が利用できる交通費を手当てしている。

前者の問いに回答するために注目すべきなのは、結核対策プロジェクトが人間の行為を一定の方向に導くことに重点を置いて社会的文脈を作成しているということである。同じようにガーナ南部で重大な健康問題を引き起こしているマラリア対策と比較してみよう。結核とマラリアの重要な違いのひとつは、前者が人から人へと感染する病気であるのに対し、後者は人から人へと直接感染することはなく、ある種の蚊によって媒介されなければ感染しないという点にある。そのため、マラリア対策において重視されているのは、蚊に人間を噛ませないようにすること、つまり、蚊の行為を一定の方向に導くことである。この目的を達成するために、ヘルスセンターでは乳児のための蚊帳を配布したり、大人用の蚊帳を販売したりする。また、蚊の行為をコントロールすることの重要性を説いて回ることにより、蚊をコントロールするための配置に人々を巻き込んでいく。蚊の苗床になるような水たまりを破壊し、道端に捨てられた空き缶を撤去し、家の中

に蚊帳を吊る。

マラリア対策においても、確かに人間の行為を方向づけるための社会的文脈の作成がなされている。しかし、それは主に蚊を封じ込めるためのモノの配置に人々を参加するように言葉のレベルで働きかけることによって行われている。実際に蚊帳が配布されるのは乳幼児に限定されているし、配布が終わればそれで終わりである。人々が水たまりを破壊したり、町中を掃除したりするために、必要な道具が配布されるわけではない。マラリア対策では、人々の行為を方向づけるためにそれほど多くのモノや制度が配置されているわけではない。

それに対し、結核対策プロジェクトにおいては、より多くのモノが、より長期的に、また、より高い精度で人々の行為をコントロールするために配置されている。薬剤の定期的な服用を確実にするための配置である。患者は結核のための薬剤をはじめて看護師から受け取るときに、PATIENT ID/TREATMENT SUPPORT CARD と呼ばれる小さなカードを渡される（図１）。このカードには、名前や住所、年齢といった患者の情報とともに、薬剤の服用方法に応じてマークを付けるための表が描かれている。毎日、薬を服用した後にその服用方法に応じて記入が行われるのだが、そのためにはこのカードの他にボールペンなどの筆記用具が必要になる。それは患者側で準備することになる。

ここから、結核対策プロジェクトの依拠する人間観のひとつを見出すことができる。専用のカードが作られ、薬剤を飲むたびにそれにチェックを入れることは、薬剤の飲み忘れというありがちなミスを防ぐために行われている。人間はやらなければいけないと分かっていることをうっかり忘れることがある。それを完全に防ぐことは容易ではない。結核治療のように薬剤の服用を定期的に、確実性を持って行う必要がある場合、それ相応のモノと行為の配置によって人間の行為を統制することで、単純なミスを防ぐ必要があるのである。

とはいえ、ガーナにおける薬剤の服用を確実にするための配置はこのミスを防ぐのに考えられる限り最適な状態にあるとは言えない。先述のように、結核の治療に当たっては、薬剤の服用を医療従事者が直接確認するという治療法が世界的に標準化されるべき方法として推奨されている。しかし、すでに何度か示唆していたように、ガーナでは必ずしも直接監視が完全な形で実践されているわけではない。患者は基本的に、自分の家で暮らしており、そこは医療従事者のいるヘルスセンターや病院から遠く離れているかもしれない。ヘルスセンターのある町に住む患者に関しても、薬剤の服用は基本的に自己管理、あるいは患者の近しい人物によって管理されており、医療従事者の直接管理化に置かれているわけではない。また、投薬管理カードにしても、「直接監視」と「自己投薬」と「飲み忘れ」といった服用方法の違いに基づいてきちんと記入されているのを私は見たことがない。結核関係のすべての書類において、薬は医療従事者の直接監視下で服用されたものとしてマークされている[(15)]。

このような、患者の行為を統治するための配置としての結核対策プロジェクトの「不備」を指摘することは容易いが、ここで重要なのは、この「不備」が社会的文脈の作成の特徴に由来しているという点である。フーコーによる重農主義の分析に言及した際にも指摘しておいたように、社会的文脈の作成は０から１を作り出す行為ではない。それは、既存の環境に手を加えることによって改編を加えるものである。そのため、結核対策プロジェクトの推移は、それ自体、病院やヘルスセンターの配置や担当する看護師の数、人々の居住パターンとそれに相応する結核患者の居住範囲、配分可能な資金といった、既存の環境のあり様に制約されているのである。

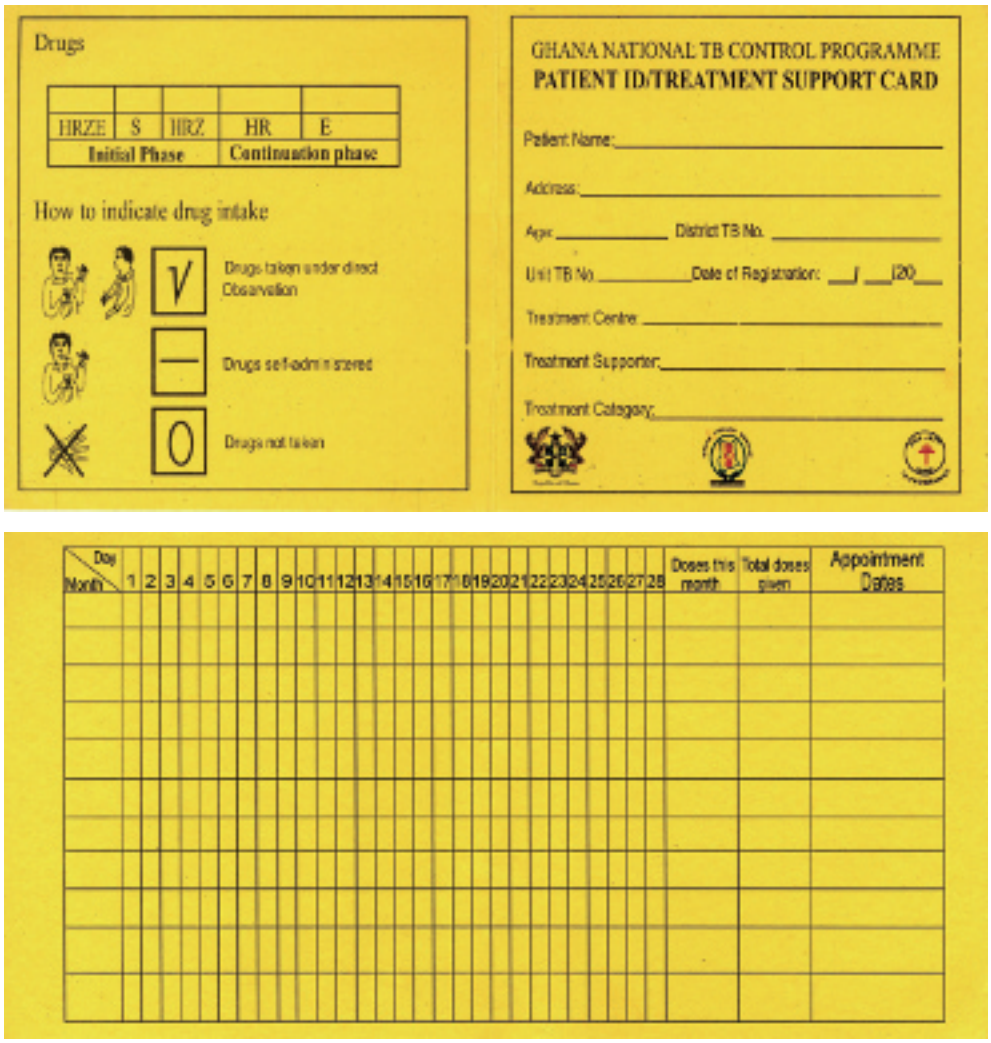

図１：結核治療用の投薬管理カード

Ⅴ　社会的文脈の作成としての適応

結核対策プロジェクトは社会的文脈を作成することを通して、結核菌の自由な拡散を阻害し、また、結核患者の行為を一定の方向に導くことで結核感染者の数を減少させようと試みている。同時に注目しておくべきなのは、社会的文脈を作成し続けているのは、何も対策プロジェクトだけではないということである。結核菌や患者もまた、自身の置かれている社会的文脈を作成し続ける存在である。

結核に対抗するための社会的文脈の作成は、最終的には結核菌をあるひとつの社会的文脈の中に置くことを目指している。それは、「薬剤が一定の血中濃度に保たれた身体」という社会的文脈である。治療を受けていない結核患者を発見し、その患者の周囲にモノと行為を周到に配置し、毎日定期的に薬剤を服用させることの目的はここにある。この社会的文脈に置かれることによって結核菌は徐々に死滅に向かうことになる。しかし、数ヶ月を要する治療の中で、薬剤の血中濃

度が一定の数値を下回る期間が断続的に続くと、結核菌は生き残り、薬剤への耐性を身に着ける。耐性菌の発生である。

社会的文脈に置かれるべき当の対象が変化することは、社会的文脈のあり様をガラっと変化させる。まるで、調査対象に関心を失った人類学者にとってそれまで社会的文脈だと思っていたものが輝きを失い、新しい対象に相応する、これまでとは異なる社会的文脈の設定が必要とされるように。もはや、薬剤は結核菌の増殖を妨げることはない。薬剤の血中濃度を一定に保つための努力は無意味なものになる。結核菌は自らを変質させることによって、自らの挙動をコントロールするために作成された社会的文脈から逸脱し、脱文脈化する。

しかし、ここでの脱文脈化は見かけほどラディカルではない。結核対策プロジェクトは、すでに耐性菌が発生する可能性を計算に入れたうえで、それをも封じ込めるべく対応しているからである。薬剤の投与が始まってから二ヶ月後と五ヵ月後、それに治療の終了する半年後に患者の痰を検査することで、はたして薬剤はきちんと効いているのか確認される。薬剤による治療が効果を上げなかった場合、そこには単なる結核菌ではなく耐性結核菌が存在していると判断され、次の手が打たれる。今度は、患者は病院の中で別の薬剤を注射によって投与される。患者は自分で注射を打つことはできないので、DOTS は完全な形で行われることになる。治療の成功率は耐性の無い結核菌に対するものよりは下がるものの、完治の見込みが無いわけではない。すべての人を助けられるわけではないが、それはしかたの無いことである。大事なのは、きちんと対応できるということであり、何％の人を助けることができたのかということである［フーコー 2007a：239-262, 2007b：69-108]。このように、結核菌の振舞いは結核対策プロジェクトにおける計算の中に含みこまれている。

このような耐性菌の発生とそれを想定したうえでの対処は、進化生物学における「赤の女王」を思い起こさせる［リドレー 1995：82-116]。耐性菌についてよく言われるように、人間と結核菌の「競争」はイタチごっこと言えるかもしれない［アイヴァーセン 2003：90-96]。ただし、結核とのイタチごっこにおいて、人間は生殖に基づく進化のメカニズムを通じて無自覚的に自らを変質させることによってのみ、結核と対峙しているわけではない。人間は、チーター（捕食者）とカモシカ（被食者）の間で行われる競争やノミ（寄生者）とチーター（非寄生者）の間で行われる競争よりもはるかに多くのものを自覚的に動員している。それが薬剤や投薬管理カードといった身体の外部にあるテクノロジーであり、そのテクノロジーを支えるネットワークである［ラトゥール 2007]。これまで述べてきたように、人間は、遺伝子だけでなく、自らの生存の環境＝社会的文脈をも変質させているのである。

このことは、結核対策プロジェクトという人間の営みの特徴に、結核菌のもつ様々な特性がすでに含み込まれていることを意味する。あるいは、結核対策プロジェクトは、変質し続ける結核菌に突き動かされていると言ってもいいだろう。結核対策プロジェクトは結核菌を特定の社会的文脈に置こうとするだけでなく、結核菌が存在するという社会的文脈に持続的に方向づけられ続けてきたのである。このように、結核対策プロジェクトにとって、社会的文脈の作成は結核と競争するための重要な手段となっていた。しかし、結核対策プロジェクトは、その性質上、結核菌だけでなく患者の振舞いにも配慮する必要がある。そして、人間の振舞いを計算に入れて社会的文脈を作成すること、つまり、人間の振舞いに方向づけられることはより難しい課題である。DOTS が有効なのは、患者の振舞いを計算に**入れないで済む**からである。

社会的文脈が人々の生のあり方を導いていくものだとするならば、それは政策立案者だけではなく、個々人にとっても重大な関心事となりうる。最晩年のフーコーが「自己と他者の統治」というタイトルの講義を二年連続で行っていたことを思い出そう［フーコー 2010，2012］。そこでは、他者を統治するためには自己を統治できていなければならず、自己を統治するためには周囲に他者を配置する必要があるという、ある種の循環が議論されている(16)。

本稿との関係で重要なのは、自己の統治と他者の統治を同型的なもの、同じ方法を用いることで達成できるようなものとして想定しうるということである。重農主義の分析を例にとって示したように、また、統治性に関するよく知られた講義において説明されているように［フーコー 2007b：109-142］、他者を統治することはモノや制度や人を配置することによって可能になっていた(17)。自己が、配置されたモノや制度や人によって統治される存在であるならば、自己の周囲にモノや制度や人を配置することによって、自身を統治する可能性が拓ける。フーコー自身も、晩年に、古代において君主が自己を統治するために自身の周囲に哲学者や日記を配置する必要が提起されていたことに言及することによって、他者の統治と同型的な自己の統治の可能性を示唆している［e.g. フーコー 2004：147-196，2010：165-185，2012：3-30］。

あるいは、フーコーが新自由主義の分析をする中で、「個人が統治化可能となるのは、つまり個人に対する影響力の行使が可能となるのは、個人がホモ・エコノミクスである限りにおいてであり、その限りにおいてのみである」と述べていたことを思い起こしてもいいかもしれない［フーコー 2008：310］。ホモ・エコノミクスとは、社会的文脈を読み解いた上でコスト・ベネフィットを計算し、自身が利益を得られるように行為する人間のことである。しかも彼らは、単に社会的文脈を読解して行為するのではなく、彼らの行為自体が集合的に社会的文脈（経済的総体）を作っていく。この意味で、人々が置かれている社会的文脈（環境）は、人々の行為の前提であると同時に結果でもある［フーコー 2007b：25-26］。

人間の行為と社会的文脈に関する同様の視点は、生物学のニッチ構築の議論に触れながら浜本も簡潔にまとめている。「人間にとっての＜境遇＝世界＞は単に人々の外部に、人々の実践とは独立に存在するわけではない。それは当の人々の実践によっても生産され、更新され再生産されている。つまりそれは人々の適応実践の（所与の）条件であると同時に産物でもある」［浜本 2010：2］(18)。

やっかいなのは、このような適応実践としての社会的文脈の作成が、同時に複数のアクターによって同一の平面、同一の領域においてなされているからである［浜本 2014：24-29］。前節で記述した結核対策プロジェクトは、無数になされ続けている社会的文脈の作成のひとつに過ぎない。結核菌による自己の変質による脱文脈化も同様に数ある社会的文脈の作成のひとつに過ぎない。それが作成された文脈から脱け出ているというのは、結核対策側からの一方的な見方でしかない。それに加えて、自らの生をより良い方向に導くためになされる数限りない社会的文脈の作成が同時に存在している。ここにおいて、私たちは社会的文脈が常に複数のアクターによって作成され続けているという認識に辿り着く。それは、余すところなく記述するにはあまりにも複雑すぎる現象である。

数ある社会的文脈の作成実践の中でもアコの言葉を理解する上で重要だと考えられるのは、彼女自身が世界に適応していった過程だろう。彼女がどのような人生の中で、誰の傍で暮らし、どんなふうに生計を営んできたのか。そこでは、必ずしも彼女の思うままにならないことも数多く

あった。社会的文脈は、複数の作成実践が干渉する中で作り上げられていくからである。

Ⅵ　アコの物語

アコはガーナ独立直後の1960年にプランカシというガーナ南部の田舎町で生まれた。伝承によると、プランカシは1565年に西方から移住してきたアチムの人々によって作られた集落であり、周辺で暮らす人々から小王（*ohene*）の君臨する小さな国（*ɔman*）としても認知されている。現在の主要な産品はカカオやオレンジ、アブラヤシといった換金作物であるが、金やダイヤモンドを含む地層の上に建てられており、細々とした採掘が行われることもある。

アコは、プランカシに昔から住んでいた地主層の一部を形成する母系親族集団のアヨコ（Ayoko）・クランの成員として二人姉妹の長女として生を受けた。現在まで縁があるのは主に彼女の母方の親族で、父方の親族との関係はほとんど途絶えている。アコの母親は五人兄弟の末っ子だったが、彼女の三人の兄たち（アコの伯父たち）はそれなりに収入のあるしっかりした男たちであったようだ。彼らからの支援を充分に受けられたこともあって、アコは大きな問題に直面することなく少女時代を過ごし、小学校と中学校を無事に卒業した。

その後、19歳の時にアコは長女をもうけるが子供の父親と結婚するには至らなかった。次女とそれに続く子供たちの父親と結婚したのは23歳の時である。結婚と同時に夫の住んでいたやや距離の離れたスフム（Suhum）周辺の村落に移住したようだが、２年ほど経って、家族揃ってプランカシに戻ってきた。その後もアコは子供を産み続け、結果的にアコは34歳のときに産んだ双子まで、合わせて９人の子供を産んだ。このような、結婚にいたならない出産、婚出に伴う夫方への転居、家族そろっての故郷への帰還、多数の子供の出産といった経験はいかにも彼女の人生に特有なもののように思えるが、プランカシではむしろ典型的とも言えるものである。

プランカシに戻ってきたアコは、町の中心部に程近いクリスチャン・レーン（Christian Lane）と呼ばれるエリアに母方の伯父が建てた家で暮らすことになった。これは夫方居住が選好されるアチムの人々の間では必ずしも理想的な居住形態とは言えず、アコの夫は肩身の狭い思いをしていた可能性がある。

アコの生活がひとつの転機を迎えたのは1999年のことである。アコの夫であったクウェクはプランカシ出身の別の女性と結婚するため、アコと離婚すると言い出した。以来、アコは子供たちをたったひとりで育てることになった。離婚もプランカシではさほど珍しいことではないが、多数の子供を抱えた夫婦の離婚はそれほど頻繁に見られるものではない。すべての子供をアコが引き取ることになったのも異例のことである。現在でも、アコの子供たちは彼らの実の父親について苦々しく語る。いわく、彼は若い女のためにアコを捨てた。学校に行くときも支援してくれることはほとんどない。娘の私が子供を産んだときも、一食に足りる程度のはした金しかくれなかった、と。彼は歩いて数分のところに住んでいるというのに。

2006年に私とアコが本格的な交流を始めた時、彼女は母方の従姉のアマとベリンダとともにひとつの家で暮らしていた。アマとベリンダはそれぞれプランカシに住んでいる夫と結婚していたが、彼女たちの夫はそれぞれ別の家に居住していた。子供たちも夫方の家で暮らす者と妻方の家で暮らす者に分かれていた。そのため、アコの家には、アコとその７人の子供と２人の孫、アマとそのひとりの子供とひとりの孫、ベリンダとそのひとりの子供が暮らしていた。

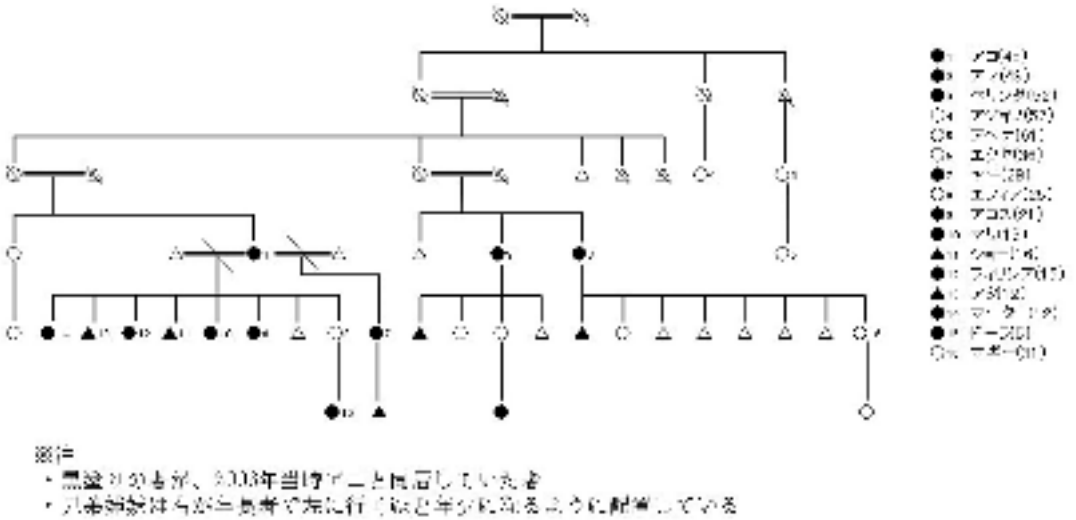

図２：アコの親族図と2006年当時の同居人

当時、アコはそれまで続けていたトウモロコシ畑の耕作をやめ、生鮮食料品店を家のすぐそばに建てて経営し始めたところだった。後になって分かったことだが、2005年辺りから徐々に体調不良を感じ始めたアコは、農作業を続けることに困難を感じていた。そこで、母方から相続していたトウモロコシ畑を小作に出し、当時アクラでそれなりに余裕のある生活していた次女からの援助を受けて、家にいてもできる仕事として生鮮食料品店を選んだのだという。

当初、80ガーナセディ[19]の元手で始めた商売は、それなりにうまくいっているように見えた。それに加えて、アコは水と灯油の販売も行っていた。このうち、水の販売は、プランカシに張り巡らされていた小規模水道の共同水場の管理者として行っていたものだった。水道からの水はバケツ一杯５円程で販売されており、そこで集められたカネを用いて水道網の保守管理が行われていた。アコの家は共同水場のそばにあり、一日中、店番をしている彼女は水道の管理者としては適任だった。彼女の生活はそれなりにうまくいっているように見え、私は、彼女が問題を抱えていることには気づかなかった。

2007年６月にプランカシを再訪したとき、アコは盛んに咳をしていた。商売もうまくいっていないように見えた。共に生活をしていた子供たちの中で年長の２人もプランカシを離れていた。長女のヤー（●7）は子供を連れて、夫の住んでいる近郊の中規模都市カデに移住していた。徒弟制を通じて針子としての技術を習得した三女のアコス（●9）は、次女のエフィア（○8）や母系親族のマギー（○16）を頼ってアクラ近郊のカーソア（Kasoa）で新しい生活をスタートさせていた。また、アコの困窮を軽減するためか、彼女の通っていた教会の牧師が娘のフィリシア（●12）を引き取り、養育するようにもなっていた。その結果、アコの元にいるのは４人の子供とひとりの孫になっていた。それでもアコは、ひとりで多くの子供を養うのが大変だとこぼしていた。

この頃、アコは、末っ子のマーターに仕事の手伝いを頼むようになっていた。夕方が近づくと、子供たちがトマトやオクラ・燻製の魚を頭にのっけた丸いベニヤの上に並べ、「エンクエーン *nkwan*（スープの意味）」と叫びながら家々を回り、夕食の準備をする人々に販売する姿を見ることができる。生鮮食料品店の売り上げを増やすため、学校から帰ったマーターはこの作業を担当するようになっていた。

2007年７月19日、２ヶ月ほど前から咳がひどくなっていたアコは、まずプランカシのヘルスセンター（以下、プランカシ HC と略す）に行き、カデのヘルスセンター（以下、カデ HC と略す）に行くように指示された。翌日、カデ HC を訪れたアコは、アクォティア（Akwatia）にある聖ドミニク病院に行き、胸部レントゲンをとってくるように指示された。アコが後にしてくれた説明によると、このとき、カデ HC の看護師はアクォティアまでの交通費を負担してくれた。しかし、この日は定期市の立つ金曜日であった。経緯については詳しい説明をしてくれなかったが、結果的に彼女はアクォティアには行かない決断をし、もらった交通費を商売の仕入れとして利用したという。

21日、私との普段と変わらない会話の中で、唐突にアコは自分が病気であると言ってきた。アコが咳をしていることを知っていた私は、ヘルスセンターに行かないのかと尋ねた。するとアコは、カデ HC に行った際に、アクォティアまで写真をとりにいくように言われたことを告げ、アクォティアまでの交通費をせびってきた（このとき、アコは看護師から交通費をもらっていたことを私に隠していた）。普段から親交があり、医療人類学者としてプランカシの外部の医療施設にも興味のあった私は、アコとともにアクォティアの病院まで行くことを決めた。

７月23日、アクォティアの聖ドミニク病院についたアコは、レントゲンの撮影に4.6ガーナセディというかなり大きな額が必要になることをそこではじめて知った。大の大人が優に４日は食える額である。持ち合わせの無いアコに代わって、交通費以外の費用も負担する覚悟のあった私が払うことにした。制度的には、結核の疑いがあるアコは治療にかかるあらゆる費用が免除されるはずであった。しかし、少なくとも聖ドミニク病院の放射線技師や職員はそう認識していなかった（あるいは、アコの側に私がいたことがそのように振舞わせたのかもしれない）。レントゲン写真を撮ったアコはそれを持ってカデ HC に向かい、GHS（Ghana Health Service）の郡の責任者を兼任する医師によって結核の診断を受けた。

翌24日、アコはプランカシ HC で、結核の患者登録をした。担当は看護師のマイクに決まった。カードに必要事項を記入し、体重を量る。37kg。いかにも少ない。マイクは、アコに、（１）渡した薬は毎日同じ時間に飲むように、（２）パイナップルやオレンジ・バナナなどのフルーツをよく食べるように、（３）激しい運動は避けるように、（４）寝るときは子供たちとは別の部屋にするように告げた。アコは、その言葉を沈痛な面持ちで聞いていた。そしてさしあたり一週間分の薬剤を受け取ることになった。アコは、火曜日は市場に行く可能性があるため、翌週は月曜日に薬を受け取りに来ることにした。

問題は結核だけではなかった。７月の後半には商売を続けるだけの元手はなくなり、生鮮食料品の販売は完全に中断してしまった。アコの生活は困窮しているように見えたが、特に親交のあった親族のアベナ（○5）とエクヤ（○6）や私を含めた周囲の助けもあって、なんとか暮らしているようだった。学校が夏休みに入ると、カデやアクラから子供たちがお土産を持って訪ねて来たり、逆にアコの元からカデやアクラで暮らしている別の子供の元に訪ねて行ったりして、アコの負担は少し軽減しているようだった。

薬を飲み始めてから２週間ほどたった頃、アコは自分の体の状態について、（１）薬を飲むとすぐ疲れてしまい、眠くなる、（２）薬を飲むとすぐお腹が空いてしまい、さっき食べたばっかりなのに、すぐ食べたくなる、という２つのことを話してくれた。担当看護師のマイクによると、この２つのことは、「薬の性質 nature of medicine」だという。

薬を飲み始めてから１ヶ月ほどたった頃、アコは自分の家の周りの草を刈り、水道の周りの石を整理するなど、徐々に体力を取り戻しつつあるように見えた。７月にはかなりきつそうだったヘルスセンターへの道のりも、さほど苦にはならなくなっているようだった。

９月に入ると、徐々にアクラやカデに遊びに行っていた子供たちが帰ってき、学校の新学期が始まった。また、娘のひとりであるマリ（●10）が子供を産んだ。９月19日、薬の服用を始めてから８週間の区切りを迎えたアコは、ヘルスセンターで体重を量った。結果は、38kg。当初より増加はしているものの、１kgという増加量は多くはない。そのことに不安を覚えたのか、ヘルスセンターから帰るとアコは、私に「パイナップルを見たことがあるか」と聞いてきた。バナナやオレンジ、パイナップルなどの果物を積極的に摂るように勧められていたものの、生活に余裕のあるわけではないアコは、その指示を実践できてはいないようだった。おりしも、オレンジの値段は徐々に上昇する時期に来ていた。カデに行くことがあったら、パイナップルを買ってきて欲しい。プランカシに住む人々が、気軽に金や物をせびる中で、アコが何か特定のものを欲しいと私にねだったのは、アクォティアへの交通費に続いて、これが二回目だった。体重が思いのほか増加していないことをアコはたいそう気にしているようだった。

９月が終わる頃、アコの体調はだいぶ良くなっているように見えた。しかし同時に、生活は、ひどく困窮していた。毎日のように、食べ物やお金をめぐって子供たちが喧嘩し、泣き喚いており、献金が困難であるために教会にも行けずにいた。見かねた教会の牧師が、日曜の朝に献金用のお金を渡しに来ることもあった。

困窮の理由のひとつに、娘のマリの出産がある。出産前、マリは実質的には何も仕事をできていなかった。一般的にガーナ南部では出産後１ヶ月程度は、洗濯など軽い仕事のみをして家で過ごし、人目に触れることを避ける。新生児の誕生は、様々な出費も必要とする。被服などは他の子供のお下がりを利用できるとしても、消耗品は購入しなければならない。また、アコはマリに優先的に食べ物を与えているように見えた。マリの相手は、アボドン（Abodon）というカデに続く道中にある近郊の集落に住んでいる若者で、マリに対し15ガーナセディの援助をしていたが、これは周辺の相場からするとかなりの小額だった。

10月の中旬には雨季の終わりが訪れ、それまで毎日降っていた雨が降らなくなった。たまり水の増加とともに蚊が増え、10月の終わりから11月のはじめにかけてマラリアが流行した。アコもマラリアと思われる病気に罹り、かなり辛そうに見えた。これに伴い結核の勢いも増し、11月の中旬まで体調不良は続いた。

その後、６ヶ月に及ぶ薬剤の服用を終えたアコは、結核が完了したという診断を受ける。しかし、2008年以降も以前ほど頻繁にでは無いものの、アコは咳を続けていた。その間に、マリは子供の父親の元で暮らすようになり、ジョー（▲11）はアブラヤシから食用油を精製する日雇いの仕事で独立して生計を建てつつあった。アコの生活があまりに困窮していたため、アコの通っていた牧師によって養育されていたフィリシア（●12）に加えて、アタ（▲13）は隣に住む比較的裕福な商店主によって、マーター（●14）はアコの母方の親族で小学校の校長をしていたアジョワ（○4）の元で、それぞれ養育されるようになった。アコは、次女から養育費を受け取って頼まれていた孫のドーラ（●15）の面倒だけを見ていた。

2009年、体調不良が続いたアコは長女のヤー（●7）を頼ってカデで暮らすようになり、プランカシにはジョー、フィリシア、アタ、マーターの４人の子供だけが残っていた。孫のドーラは、

首都のアクラに住む次女のエフィア（○8：ドーラの母）の元で暮らすようになっていた。2010年の夏、カデで食事を作っている最中に倒れたアコは、周辺で最も設備の整っているアクォティアの聖ドミニク病院で3.5カ月の入院生活を送ることになった。その間、毎日、注射を打たれていたという。このことから、この時の彼女の病気は再発した耐性結核であった可能性が高い。退院した後、アコは再びプランカシで暮らすようになった。

Ⅶ　アコによる社会的文脈の作成

アコの人生についての物語は、同時に、彼女がこれまでにどのように社会的文脈を作ってきたのかについての物語でもある。彼女による社会的文脈の作成は、主として生計手段と傍で暮らす人間の変更によって行われている。

当初、プランカシで農業を営んでいたアコは体調の悪化に伴って、生計を変えている。これは彼女自身の選択というよりは農業を継続することが困難になったためであり、このアコによる社会的文脈の作成には、すでに結核が織り込まれていた可能性が高い。同時に、アコが他ならぬ生鮮食料品店という生計手段を選択したのには、別の理由もある。

プランカシではすべての農民は潜在的には商人であり、農業と商売を兼業している者も少なくない。アコと同居していた従姉のアマもプランティンやキャッサバなどを育てるかたわら、彼女たちの家で細々とアピタシ（*akpeteshie*）と呼ばれるヤシ酒の蒸留酒を売っていた。そのため、農業を続けられなくなったアコが商売を始めるというのは、見かけほど劇的な転身ではない。同時に、女性が生計を立てる手段の多くが教師や看護師、髪結いや仕立屋といったトレーニングを必要とするサービス業か、ヤシ油の精製や食堂や屋台といった重労働に限定される中で、生鮮食料品店は体調が悪くても続けることができる数少ない生計手段であった。アコは完全に自由な「なんでもあり」の世界の中で社会的文脈を作成していたわけではない。

とはいえ、アコは必ずしも商売に長けていたわけでもなかった。彼女の商売は、利益を上げて資本を増強していくというよりは、元手を削りながら食いつないでいくというものだった。私は、週に一度、食材を買って彼女の元を訪れ、一緒に比較的きちんとした食事を作って食べていたが、それ以外の機会にどうやって食べていたのか不思議に思えるほどだった。アコが面倒を見ていた孫のドーラの養育費という名目で次女のエフィアから送られていた送金が大きな助けになっていたのだろう。

このようにアコによる社会的文脈の作成は必ずしもアコの主体的な選択の結果ではなく、彼女が置かれていた社会的文脈によってそもそも方向づけられていた行為によって、その社会的文脈を改編するという形でなされている。

更に、生鮮食料品店という生計手段の選択が、今度は、その後の結核治療にもいくつかの影響を与えている。市の立つ火曜日と金曜日にはヘルスセンターに薬剤を受け取りに来られないというのもそのひとつであるし[20]、冒頭の告白にあったように、検査のために支給された交通費を商売の仕入れに使ったのも、彼女の生計の選択と密接に関連している。

アコの人生において、より根本的な社会的文脈の作成となっているのが、誰の傍で暮らすかという選択である。彼女の人生に決定的な影響を与えているのが結婚であることは間違いない。それは、多くの子供の出産と早期の離婚、養育の負担といった事柄に大きく影響を与えている。し

かし、アコが闘病生活を始めてからは、子供たちの父親はほとんど影響を与えていない。

彼女が結核を治療していく過程で大きく変化していたのは、子供たちとの関係である。当初、７人の子供と２人の孫とともにプランカシで暮らしていたアコは、最も少ないときにはひとりの娘と２人の孫とカデで暮らしていた。このような一緒に住まう者の変化は、必ずしもアコの選択の結果というわけではなかったが、彼女が子供たちの扶養を他の者に頼ろうとしていた傾向があったことは確かである。

トウモロコシ畑を小作に出したことで、世帯としての仕事と収入が減ったことを受けて、他の町でも自活できる長女のヤー（●7）と三女のアコス（●9）は独立生計を立てるべく、2006年に他の町へと移住していった。プランカシには、女性がひとりで生計を立てる手段がそれほど多くなく、仕事の無い若者たちは持続的に都市部へと移住している。彼女たちは、クリスマスやイースターに帰郷することが望ましいとされているが、それが可能なのは比較的成功した者に限られる。アコスも2010年のクリスマスまで４年の間、プランカシに戻ってくることはなかった。

結核の治療が始まった2007年から2008年にかけて、フィリシア（●12）、アタ（▲13）、マーター（●14）の３人の子供は友人や親族によって扶養されるようになっていた。このような扶養者の変更は、それほど頻繁に行われるわけではないが、かといってそれほど珍しい事態でもない。しかし、このような友人や親族への養育依頼は、すべての人がすべての人に対して行えるものではなく、アコ自身や子供たちのこれまでの文脈作成によって培われてきた特定の関係性によって可能になったものである。同時に、アコによる子供たちの扶養依頼を受け入れるかどうかは、依頼された者による社会的文脈の作成としても考えることができる。実際、アコによる依頼が受け入れられるかどうかは必ずしも明確ではなく、断られる可能性を常にはらんだ危うい申し出でもあった。それらの複数の社会的文脈の作成としての扶養の受け入れは、アコによる社会的文脈の作成と同一の領域で行われたものである。

同時に、マリ（●10）の出産に見られるように、できる限り負担を軽減しようとするアコの社会的文脈の作成は、必ずしも彼女の思うままに進んでいったわけではない。マリの出産は、マリ自身や彼女のパートナーによる社会的文脈の作成の一環であり、それはアコの社会的文脈の作成と同一の領域で行われている。それらの複数の社会的文脈の作成が干渉する中で、アコの闘病生活は進んでいったのである。

このような周囲の人間による社会的文脈の作成と干渉しながら進んでいくアコによる社会的文脈の作成と、国際的なネットワークとつながり、国家規模で実施されている結核対策プロジェクトによる明確な目的を持った社会的文脈の作成の間には大きく違いがあるようにも見える。確かに、両者は、配置する人やモノの量や範囲に関して、大きく異なっている。しかし、この二つの営みは、どちらも同じように既存の社会的文脈に基づきながらそれらを改編するものであり、アコの社会的文脈を作成していくものである。そして、結核対策プロジェクトによって配置された交通費を商売に使ったという冒頭のアコの発言からも分かるように、結核対策プロジェクトもまた、その他の様々な社会的文脈の作成との干渉から免れるものではない。複数の社会的文脈の作成が干渉する中で作られた社会的文脈によって、アコの行動は一定の方向に導かれていたのである。

Ⅷ　環境の書き換え

本稿では、ガーナ南部の農村地帯における結核を事例に用いながら、政策や結核菌や人間の実践を社会的文脈の作成という観点から記述してきた。そこで目指されたのは、複数のアクターによる作成実践が干渉する中で形成される社会的文脈＝環境によって、私たちの行為の筋道が付けられ、一定の方向に導かれているという人間観を提出することであった。同時に、本稿は、ガーナのカカオ農村で暮らす彼女たちとディスプレイに向かって原稿を作る私が、互いに影響し合いながら同一の原理で統治されていることを示そうという試みでもあった。

後者の点をより明確にするためにも、ここで社会的文脈という言葉を用いることの問題性について正確に認めておくべきだろう。人類学者は、コンテクストという言葉を本稿で言うところの文脈と社会的文脈の両方を指し示すものとして、半ばいい加減に使用してきたきらいがある。社会的文脈を明らかにすることが自分たちの仕事だと考えながら、それがいかなる意味で「文脈」と呼びうるものであり、それが文章における文脈とどのような差異があるのか、人類学者はそれほど明確に意識してこなかった。これまでの本稿の記述は、そのいい加減さにあえてのっかってきた。しかし、当然のことながら、文脈の作成と社会的文脈の作成には、いくつかの重要な差異が存在している。この差異を明確にするために、以後、「社会的文脈の作成」を「環境の書き換え」という言葉に置き換えてこれまでの議論を整理していくことにしよう。

本稿では、政策としての結核対策、耐性菌による適応、アコの生存戦略という三種類の環境の書き換えを取り上げてきた。政策としての結核対策は、それまでに配置されていた病院やヘルスセンター、看護師や医療機器に新たな役割を担わせることによって環境を書き換え、結核患者を治療し、結核の蔓延を防ごうとしていた。結核菌は、長い治療生活の中で抗生物質の断続的な投与という淘汰圧に曝される中で、転身して耐性を身につけることがある。このような転身は、結核対策プロジェクトによって作られてきた環境を無効化する。しかし、転身としての脱文脈化は、必ずしも進化のメカニズムによってだけ起こるわけではない。明示的には議論しなかったが、農民から商人へというアコの転身も、特に土地との関係において彼女の環境を一変させるようなものであっただろう。同時に、アコは傍で暮らす者を変更しながら生きてきたが、それは、周囲の者による多様な環境の書き換えと同一の平面上で干渉しあいながら行われていた。

このような環境の書き換えと文章における文脈作成の間にはどのような差異が存在しているのだろうか。まず、文章における文脈作成は、基本的に著者の手によって行われるものであって、それが他の者による文脈作成との干渉の中で行われることはない。先行研究による方向づけや、査読者や編集者とのやり取りの中で修正が加えられること、読者の志向に基づいて浅く読まれたり深読みされたりすることはあるだろうが、環境の書き換えに比べれば、比較的静態的であることは間違いない。次に、文脈の作成が文字を刻み込むことで固定化していく行為であるのに対し、環境の書き換えにおいて固定化されるものは皆無と言っていい。配置されたモノや制度や人間は、後に変容する可能性、書き換えられる可能性に開かれている[21]。

同時に、人類学者が紙の上で作成した文脈は、それ自体が環境の一部ともなりうる。それは、他の研究者からの批判を誘発し、政策立案者や人々の行為に影響を与えることによって、更なる環境の書き換えを方向づけていくこともあるだろう。他方で、人々の行為を方向づける環境は、人類学者の解釈の自由を縛るものでもある。文章における文脈が読者の自由な解釈を制限するの

と同じである。もちろん、それらは逸脱も許すだろうが、なんでもありの世界を決して作り出さない。人類学者は、自分がフィールドで見聞きしたことに意識的に忠実であろうとするだけではない。彼らは、フィールドで共に暮らした人々と干渉しながら書き換えていった環境に自らも統治される存在である。この意味で、文脈の作成と環境の書き換えは、比較可能であると同時に、相互に影響を与えながら、事態の推移を導いていく連続的なものでもある。

これまで述べてきたような、他者の統治と自己の統治の関係を環境の操作における相互干渉として捉える視点は、フーコーの統治論を人類学に利用可能な形で発展的に継承する試みでもある。箱田が手際よく整理しているように、いわゆる後期フーコーと前期フーコーの間には断絶があるというフーコー理解は根強い。しかし、フーコーの講義録を通読すると、それが統治を鍵として一貫したものとして理解できることが分かる［箱田 2013;浜田 2013］。先述のように、ミシェル・フーコーは、その晩年に「自己と他者の統治」というタイトルの講義を二年続けて行っている。そこでの分析の多くは古代ギリシャやローマにおける自己のテクノロジーに関するものに終始しているものの、自己の統治と他者の統治の関係について議論することが予告されてもいた［フーコー 2010：10］。

自己の統治と他者の統治の関係についてフーコーがカントを引きながら言及するのは、自己の統治と他者の統治の配分の仕方に多様性があるということである。しかし同時に、自己の統治を可能にするような他者の統治があるというカントの議論に賛同しているようにも見える［フーコー2010：10-50］。そのため、＜自己を統治できるような自己が他者の統治によって作られている＞という他者の統治に一元的に回収されるモデルをフーコー自身の主張として抽出することもできるかもしれない。しかし、このモデルに従うならば、フーコーが強調していた自己のテクノロジーの分析は、それ以前に彼が行っていた権力のテクノロジーの分析に包含されることになってしまう［フーコー 1990］。もし、自己のテクノロジーを権力のテクノロジーと同様に検討に値するものと考えるならば、そして、権力を分析するフーコーと自己を分析するフーコーに連続性を認めるならば、自己の統治と他者の統治の関係はこれらとは異なるモデルによって説明されなければならない。あるいは、自己の統治と他者の統治の「配分」に注目するというフーコーの言葉にこだわるならば、＜他者による統治と自己による統治のせめぎ合い＞という二項対立的なモデルを導き出すことも可能かもしれない。しかし、このモデルを採用すると、複数の統治の共存を想定していた統治術についての議論［フーコー 2007b］との整合性が取れなくなる。

フーコーの議論を一貫したものとして理解するためのヒントは統治という言葉にある。統治についてフーコーが強調していたのは、モノや人を配置することによって人間の行為を一定の方向に導くということだった［フーコー 2007b：37-142］。また、自己の統治においても、教師や哲学者の教えを受けることやその日に行ったことをすべて手紙に書くということ、つまり、自身の周囲に人やモノを配置するという点が強調されている［フーコー 2010：165-185, 2012：3-30］。

統治が人やモノの配置によって行われるということを念頭に置くならば、＜他者の統治によって自己を統治できるような自己が作られている＞という自己と他者の統治に関する直線的・因果的なモデルや＜他者による統治と自己による統治のせめぎ合い＞という二項対立的なモデルから、＜特定の人を統治するための自己や他者による複数の統治が同一の領域に展開している＞という実践的・領域媒介的なモデルへと移行する必要がでてくる。そして、複数の統治が同一の領域で実施されているのであれば、複数の統治は必然的に干渉しあうことになる。

本稿では、自己の統治と他者の統治のそれぞれを社会的文脈＝環境に対する働きかけとして記述・分析したうえで、複数の統治の干渉に注目してきた（図式的に整理するならば、Ⅲ章とⅣ章の記述が他者の統治に関するもので、Ⅴ章からⅦ章が自己の統治に関するものということになる）。この枠組みの有効性は、環境という媒介的な領域を想定することで、統治が余白として残す領域を可視化できる点にある。同時に、自己の統治が環境を経由して他者を統治する要素の一部を作り出す様子を記述することで、自己の統治と他者の統治の不可分な関係を具体的な記述、つまりフィールドで見聞きしてきたことの記述を通じて明らかにすることも可能になる。本稿が、フーコーの統治論を人類学に利用可能な形で発展的に継承するものであるというのは、この意味においてである[22]。

最後に、このような人間観といわゆる文化の関係について、簡潔に展望を示しておこう。主として人やモノの配置に注目してきた本稿では、環境とその書き換えの物理的な側面を強調してきたが、浜本［2010］が指摘しているように、人間が住み着く環境は言葉や意味によっても構成されており、書き換え実践の中にはそれらを変更していくような営みも含まれうる。本稿では、言葉や意味に関してはその動態性を指摘するというよりは、アコの行為を方向づける要素のひとつとして、つまり、所与として扱ってきているが、言葉や意味の書き換えをも視野に入れたより複雑な状況の記述を行うことも可能だろう［e.g. 浜本 2014］。

同時に、言葉や意味への注目は、アコによる環境の書き換えの特異性を抉り出すのにも役に立つかもしれない。私とアコの書き換え実践の差異は、単純に、「生きる者」とそれについて「書く者」の差異に還元されるわけでもない。環境の書き換えが、それ自体、集合的に作成されてきた既存の環境のあり様に筋道をつけられている以上、その集合性について、いわゆる「文化的特徴」について語ることもできるだろう［中川 2014］。本稿では不十分な形でしか展開できていないが、例えば、アコの家族のあり方、誰と一緒に過ごし、共に過ごせない子供たちを誰が扶養するのかといった点については、それを導いた環境の中に、プランカシで暮らす人々にある程度共有されている家族観や相互扶助への性向が含まれていると指摘することもできる［浜田 2010］。いずれにしても、環境の書き換えと文化の関係がいかなる関係にあるのかについては、今後の課題として、改めて整理する予定である。

Ⅸ　アコはなぜそんなことを言ったのか

アコはカデの看護師から交通費をもらっていなかったのではないか、と思うことがある。それは充分にありえることだ。確かに、患者がレントゲン写真を撮影に行くための交通費は支給されることになっていた。しかし、予算には上限があるため、それが常にタイミングよく支給されるのかどうかは不確定だ。実際、無料で撮影できるはずだったレントゲン写真の代金は、他ならぬ私が払ったのだ。交通費についても、支給されていなかったとしてもおかしくない。そういった「政府の不備」を人々は隠したがる。

人類学者なのだから「本当」はどうだったのかアコに確かめればいい。それは正しい。だが、今となってはそれは不可能だ。だとしたら、冒頭のアコの発言をまた別の文脈に据えてみてもいいのかもしれない。「本当」のことは分からなくても、また別の側面が浮かび上がるだろう。

その日、私はいつものように食堂に朝ごはんを食べに行き、その帰りにアコの家を通りかかっ

た。2007年７月のことだった。2005年にはじめてプランカシを訪れて以来、私は毎日欠かさずアコと会話をしていた。それは、私がはじめて借りた部屋から町の中心部に出るための通路沿いにアコの家があったからだ。それに、アコの子供や孫たちは、彼女に似て、気さくで人懐っこく、目の大きな魅惑的な顔立ちをしていた。アコが一日の大半を家の前のベンチに座って過ごしていたことも、調査のために常に話し相手を探している私には都合が良かった。フィールドワーカーとして半人前だった私は、この「都合の良さ」が彼女の病気と密接に関係していることに、この文章を書き始めるまで思い当たることもなかった。

アコは日本から遠く離れたガーナの田舎町でひとりで調査を行っていた私の心の支えであり、最も重要なインフォーマントであった。正直に言えば、彼女が私に何かをねだることがなかったことも、当初それほど裕福ではなかった私にとっては居心地の良いものだった。だが彼女は、私が、エクヤ（○6）の中学生の娘に世帯調査の手伝いを依頼し、それなりの金額を支払っていたことも知っていたに違いない。

「彼らは私に交通費をくれたけど、私はそれを使っちゃった」。

「本当」のことは分からない。けれど、それがアコが私に頼った最初の瞬間だったことは間違いない。それはおそらく、彼女やその家族たちが、私をアコの「息子」と呼ぶようになっていく過程の決定的な契機でもあった。同時にそれは、これまでガーナで過ごした時間の中で最も印象深い一言でもあった。

この懐古的な記述があまりにもナルシシスティックで蛇足的だと思われる人もあるだろう。私もそう思う。しかし、もし私にこの文章を書かせるように導いたものがあるとするならば、それはアコが私たちとともにその中で生活し、また、彼女が生きることによって書き換えていった社会的文脈の他にはありえない。

付記

本稿の執筆は、日本学術振興会および澁澤民族学振興基金からの助成によって可能になった。また、本稿の草稿に対して、先端課題研究のメンバー、および、中川理、松村圭一郎、深田淳太郎、上村淳志、田口陽子、奈良雅史、緒方しらべの各氏から貴重な助言を頂いた。ここに記して、感謝の意を示したい。ただし、本稿についてのすべての責任は筆者に帰属する。

注

（１）本稿に登場するすべての人名は仮名である。

（２） 後述するように、人類学では、コンテクストという言葉を、文章における文脈と生活世界における文脈の両方を指し示すものとしてルーズに使用してきた。本稿では、このうち生活世界における文脈を「社会的文脈」と呼んでいく。市野川［2006］やラトゥール［Latour 2005］の指摘するように、「社会的」という形容詞を用いることには弊害も多いのだが、文章における文脈とは違うという点を強調するために、本稿ではあえて「社会的」という言葉を用いていく。

（３） ここで参照した米澤の短編は、一般に「氷菓シリーズ」と呼ばれる一連の作品の一部である。作者としての探偵という人物像は「氷菓シリーズ」にたびたび登場するモチーフであるが、その他にも奉太郎と社会的

文脈の様々な関係が一連の作品の中で描かれていることを付言しておく。

（4）　ミステリにおける推論と事実の関係について、春日は＜外観＞と＜存在＞という言葉を使いながら説明している［春日 2003：109-134］。

（5）　民族誌の中には、多様な解釈に開かれていることをあえて明示しようとするものもあるかもしれない。しかし、それもまたそのようなメタレベルの解釈の筋道をつけようと意図的に試みられていることに変わりはない［クリフォード 2003：35-74］。

（6）　この意味で、高桑和巳が統治性に関する講義につけている訳注は示唆的である。「「処置（disposition）」は意味の広い単語で、配備・配置・整序・処理・処分といった意味あいを含むが、その基本的な意味は問題を「別々に立てる」ということ」［フーコー 2007b：142］。

（7）　とはいえ、もし私たちが客観主義的な思考を完全に排除できないのであれば、フィールドの現実と学会の流行がまったく独立して展開している現象だと考えることもまた説得的ではないだろう。しかし、任意の二つの事象がどこかでつながっているという説明をすることがさほど難しくない場合でも、すべての事象が互いにどこかでつながっているという把握を行うことは不可能である。人間の認知には限界があり、必ず思考の節約が行われる。

（8）　WHO の報告書では、2011年に発見された新規結核患者の87％に対する治療が成功したと推計されている［WHO 2013：28］。

（9）　WHO の報告書では、2012年の HIV に感染している結核患者は110万人とされ、そのうち75％がアフリカ地域の患者だと推計されている。なお、HIV に感染している結核患者の死者数は32万人と見積もられている［WHO 2013：6，68］。

（10）　バンクーは、摩り下ろしたキャッサバと粉に引いたトウモロコシを火にかけながら熟成させたもので、ガーナ南部でよく食べられる比較的安価な食べ物である。

（11）　結核治療に効果があるとされ、治療の第一選択として用いられているイソニアジドとリファンピシンの二つの薬剤に耐性を持つ結核を、多剤耐性結核という。WHO の報告書によると、107ヵ国のデータを集計した結果、2010年に多剤耐性結核患者の48％が治療に成功しているという。なお、アフリカ地域では17％が治療中に死亡しているとされる［WHO 2013：56-57］。

（12）　現在の WHO では、DOTS は直接監視下短期治療療法だけでなく、それを含めたより広範な結核対策戦略そのものを指す言葉として用いられている。そこには、（1）政府の積極的な取り組み、（2）有症状受診者に対する喀痰塗抹検査を主とする患者発見、（3）適切な患者管理のもとでの標準化された短期化学療法の導入、（4）抗結核薬や検査試薬などの消耗品の確実な供給、（5）標準化された記録・報告に基づいた対策の評価の５つが含まれるとされる［WHO 2013 n.d.；須知 2001］。直接監視という狭義の DOTS は、このうち「適切な患者管理」に含まれている。

（13）　ガーナでは、はじめて治療を受ける結核患者には、イソニアジド、リファンピシン、ピラジミナド、エタンブトール、ストレプトマイシンの５種類の化学物質を一錠に配合した配合薬が処方される。

（14）　ここから分かるように、ガーナ南部の農村地帯で行われている結核治療は、多くの場合、患者による薬剤の服用を医療従事者が直接監視するものではなく、厳密な意味での DOTS とは異なっている。

（15）　WHO も直接監視を医療従事者以外の者が行うことを認めている［WHO n.d.］。しかし、ガーナでは医療従事者以外の者による監視も厳密には行われていない。私にはガーナ政府を批判する意図は無いものの、2000年に DOTS の普及率100％を達成したというガーナヘルスサービスの主張は正確とは言えない［GHS n.d.］。

(16)　フーコーの議論について言えば、この循環は見せかけのものではある。自己を統治することで統治が可能になる他者は自身が導くべき民衆や家族であり、自己を統治するために必要とされる他者とは哲学者のことだからである。古代を対象にするとき、他者は必ずしも同一の対象を指し示しているわけではない。

(17)　この点については、アガンベンの「装置とは何か？」という小論にも詳しい。「装置は一つの非等質的な集合であり、潜在的には、言語的なものにせよ非言語的なものにせよ、あらゆるものを等しく包含する。そこに含まれるのはもろもろの言説・制度・建造物・法・警察措置・哲学的命題などである。装置自体は、これら諸要素のあいだに定まる網目である」[アガンベン 2006:85]。また、本稿とは強調点が異なるものの、フーコー、ドゥルーズ、アガンベンの装置論の系譜については、ブッソリーニによる整理［Bussolini 2010］を、人類学における装置論の展開については中川の論考［2009］を、それぞれ参照せよ。

(18)　浜本が述べているように、この文章はかつて私が所属していた一橋大学の社会人類学共同研究室の学生向けwebページに掲載されていたものであり、これまでの私の研究の意識的・無意識的な指針となってきたものである。ここで述べられている事態についての浜本自身による分析としては、認識論から実践論への移行や信念の生態学を提起している直近の単著［浜本 2014］を参照のこと。やや本筋から反れるので詳細な論評は避けるが、浜本の議論と本稿のあいだには、浜本が「社会空間」における信念や言説の分析に力点を置く傾向があるのに対し、本稿は環境におけるヘルスセンターや薬剤や投薬管理カードや病原体といった質量を持ったモノの分析に力点を置いているという差異がある。多くの読者にとって、この差異は差異と言えない程度の微々たるものに見えるかもしれないが、私はこの差異の背景に、よって立つ人間観の差異があると考えている。表現が適切であるかどうかは分からないが、私は、私自身と同じように、人間は案外いい加減で適当に生きていると考えている。

　また、類似の現象を人類学における存在論の枠組みで分析したものとして大村の論考［大村 2014］も参照せよ。

(19)　ガーナでは、2007年７月から12月にかけて行われたデノミに伴い通貨単位が変化しているが、本稿ではデノミ以後の通貨単位を用いる。2007年の通貨レートは概ね１US$ ＝0.8ガーナセディである。

(20)　逆に、もしアコが農業を続けることができていたら、祖先崇拝との関係で休耕日とされている火曜日にこそ薬を受け取りに来ることになっていただろう。

(21)　このような差異があるのにもかかわらず、環境を文脈とのアナロジーで想像することに一定のメリットがあることも事実である。少なくとも私には、環境の「書き」換えという表現が、環境の作成や環境の作り直しという表現よりもどこかしっくりくる。「言語は最古の装置かもしれない」［アガンベン 2006：89］。

(22)　統治に注目しながらフーコーの議論を読み解くことは、『フーコーの闘争：＜統治する主体＞の誕生』で展開された箱田徹による優れたフーコー論とも一致している。箱田は、権力と主体の二元論から統治の一元論への移行の必要性を説得的に提示し、講義録を踏まえた新しいフーコー理解の可能性を拓いている［箱田 2013］。他方で、本稿で採用しているフーコー理解と箱田のそれとの間には微細な差異も存在している。それは、箱田が「自己と他者の統治」が、「自己の統治」と「他者の統治」ではなく、「自己と他者」の統治なのだと繰り返し主張している点と関係している。箱田のこの主張は、真理や霊性への注目が果たした役割に正当にも注目した結果なのだろうが、自己の統治が同時に他者の統治でもあり、他者の統治が自己の統治でもあるという無媒介的な一体性が強調されているようにも見える。その結果、支配と統治の違いを説明する中で箱田自身が強調していた可能性に開かれた場［箱田 2013:205-211］をどこか窮屈なものとして、つまり、＜他者による統治と自己による統治のせめぎ合い＞という二項対立的なモデルに似たものとして提示しているようにも見える。おそらく、このような差異が生じる背景には、私にとってフーコーが正確に把握する対

象ではなく、人類学者として文脈を作成するための手段であることがあるのだろう。Ⅱ章での議論を思い出して欲しい。少なくとも人類学者たる私にとって、できる限り忠実であろうとする対象はフィールドで見聞きしたものであって特定の思想家や理論ではない。

参照文献

アガンベン、ジョルジュ

2006「装置とは何か？」『現代思想』34（7）：84-95。

Bussolini, Jeffrey

2010 What is Dispositive? *Foucault Studies* 10：85-107.

クリフォード、ジェイムズ

2003『文化の窮状：二十世紀の民族誌学、文学、芸術』太田好信他訳、人文書院。

クリフォード、ジェイムズとジョージ・マーカス（編）

1996『文化を書く』春日直樹他訳、紀伊国屋書店。

Dilley, Roy

1999 Introduction: The Problem of Context. In *The Problem of Context*. Roy Dilley（ed.), pp. 1-46. Berghahn Books.

フーコー、ミシェル

1990「自己のテクノロジー」『自己のテクノロジー』ルーサー・マーティンら（編）、田村俶、雲和子訳、岩波書店。

2004『主体の解釈学：コレージュ・ド・フランス講義 1981-1982年度 ミシェル・フーコー講義集成11』廣瀬浩司、原和之訳、筑摩書房。

2007a『社会は防衛しなければならない：コレージュ・ド・フランス講義 1975-1976年度 ミシェル・フーコー講義集成６』石田英敬、小野正嗣訳、筑摩書房。

2007b『安全・領土・人口：コレージュ・ド・フランス講義 1977-1978年度 ミシェル・フーコー講義集成７』高桑和巳訳、筑摩書房。

2008『生政治の誕生：コレージュ・ド・フランス講義 1978-1979年度 ミシェル・フーコー講義集成８』槙改康之訳、筑摩書房。

2010『自己と他者の統治：コレージュ・ド・フランス講義 1982-1983 ミシェル・フーコー講義集成12』阿部崇訳、筑摩書房。

2012『真理の勇気：コレージュ・ド・フランス講義 1983-1984 ミシェル・フーコー講義集成13』槙改康之訳、筑摩書房。

ギアツ、クリフォード

1996『文化の書き方・読み方』森泉弘次訳、岩波書店。

箱田　徹

2013『フーコーの闘争：＜統治する主体＞の誕生』、慶應義塾大学出版会。

浜田　明範

2010「医療費の支払いにおける相互扶助：ガーナ南部における健康保険の受容をめぐって」『文化人類学』75（3）：371-394。

2013「ドキュメントを通じた統治の連鎖：ガーナ南部のヘルスセンターを事例として」、日本文化人類学会

第47回研究大会（於慶応大学、2013.6.9）発表資料（未公刊）。

浜本　満

2005a「村の中のテント――マリノフスキーと機能主義」『メイキング文化人類学』太田好信、浜本満（編）：pp. 67-90、世界思想社。

2005b「見晴らしの良い場所――グリオールとドゴン研究」『メイキング文化人類学』太田好信、浜本満（編）：pp. 91-112、世界思想社。

2014『信念の呪縛：ケニア海岸地方ドゥルマ社会における妖術の民族誌』、九州大学出版会。

市野川　容孝

2006『社会』、岩波書店。

アイヴァーセン、レスリー

2003『薬：DRUGS』、岩波書店。

春日　直樹

2003『ミステリイは誘う』、講談社現代新書。

Latour, Bruno

2005 *Reassembling the Social: An Introduction to Actor-Network-Theory*. Oxford University Press.

ラトゥール、ブルーノ

2007『科学論の実在：パンドラの希望』川崎勝、平川秀幸訳、産業図書。

マキューン、トーマス

1992『病気の起源：貧しさ病と豊かさ病』酒井シヅ、田中靖男訳、朝倉書店。

中川　理

2009「不確実性のゆくえ：フランスにおける連帯経済の事例を通して」『文化人類学』73（4）：586-609。

2014「市場：モデルと現実のあいだ」『現代社会を学ぶ：社会の再想像＝再創造のために』内海博文（編著）：pp. 167-189、ミネルヴァ書房。

大村　敬一

2014「ムンディ・マキーナとホモ・サピエンス：イヌイトの存在論に寄り添うことで拓かれる人類学の課題」、現代思想42（1）：134-147。

リドレー、マット

1995『赤の女王：性とヒトの進化』長谷川真理子訳、翔泳選書。

佐藤　純一

1999「医学」『医療社会学を学ぶ人のために』進藤雄三、黒田浩一郎（編）：pp. 2-21、世界思想社。

米澤　穂信

2010『遠回りする雛』角川文庫。

WHO（World Health Organization）

2013 *Global Tuberculosis Report 2013*. World Health Organization.

＜インターネット上に存在する資料＞2013年12月10日にアクセス確認

GHS（Ghana Health Service）

n.d. Tuberculosis Control Programme.

（http://www.ghanahealthservice.org/about_programmes.php）

浜本　満
2010「存在論の選択可能性？：熊本大学フィールドシンポジウム「自然と文化のインターフェイス」に寄せたコメント」。
（http://members.jcom.home.ne.jp/mi-hamamoto/research/workingpaper/nature-soc-com.pdf）
須知　雅史
2001「世界の結核対策の現状」。
（http://www.jata.or.jp/rit/rj/0104such.html）
WHO（World Health Organization）
n.d. The Five Elements of DOTS.
（http://www.who.int/tb/dots/whatisdots/en/index.html）

（国立民族学博物館機関研究員）